

# 若松美黄の舞踊理論と 作品への挑戦

筑波大学大学院 唐沢優江  
筑波大学 頭川昭子

## 1. 研究の目的

舞踊理論と舞踊作品は、表裏一体をなし、作者の理論や意図に基づいて作品は創作され、作品の創作を通して理論が形成されると言えよう。

若松美黄は、1960年代、既存のモダンダンスに対して枠組みの破壊と拡大を試み、前衛という潮流を導いた舞踊家の一人である。若松は、モダンダンスという領域の中で、多様な試みに挑戦し、多くの批評家によって評価を得ている。また、若松の舞踊の実践に基づく研究論文、著述文献の中には、独自の舞踊理論が展開され、実践とともに注目に値するものである。本研究は、若松の著述文献とインタビュー調査から、若松の舞踊理論と作品への挑戦を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

若松の著述文献とインタビュー調査から、以下の2点に焦点をあて舞踊理論が明らかにされた。

1. 舞踊全般にわたる特性や作品論、舞踊作品における身体観などに関する総論。
2. 舞踊作品の内容と手法に関する実践論。

## III. 結果と考察

著述文献とインタビュー調査による検討から、以下のような若松の舞踊理論が導きだされた。

### 1. 舞踊総論

- 1) 舞踊は現象として形が留まるのではなく、「流れ」ととらえられ、リズムの反復、球体、円という形態の循環性を形式とする。
- 2) 舞踊は呪術的特性を持ち、神・発信者・受信者という三極で伝達する。
- 3) 舞踊を危機の緩和的情動反応という、人間の本能的、生理的反応として捉える。
- 4) 舞踊作品は、人間の身振りの持つダイナミズムを追求する。
- 5) 舞踊作品における身体観は、関節・筋肉感覚、骨格感覚、身体認識の崩壊と分子的身体認識ととらえられる。

### 2. 作品創作の実践論

若松の舞踊作品における内容は、現代性が追求されるとともに、内容の幅が見られ、手法は、戯画的な具象的表現から動きのコラージュによる抽象的表現という、具象と抽象をダイナミックに往還する表現方法が見られる。また、内容と手法との関係は、内容が先にあってそれを動きによって表現するといった固定的なものではなく、作者自身もテーマを探りながら創作される。ゆるぎない

テーマの追求とともに、偶然性や遊びも取り入れ、内容と手法とが行き交う二本立て進行の創作過程が提示されている (Fig.1 参照)。

作品創作に対する態度について、若松は、絶えず自己批判の意識を持ち、自分の座標を固定しない創作態度をとり、常に時代の流動性と関係性の中で作品が創作される。

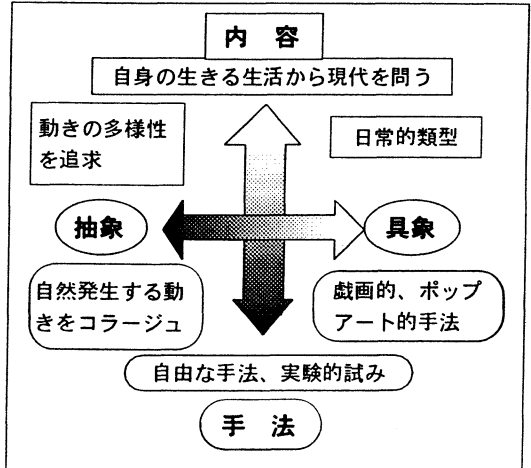


Fig.1 作品創作の実践論

## IV. 若松美黄の作品への挑戦

一事例として、若松美黄・津田郁子自由ダンスカンパニー作品『センサー』(2001年11月22日 埼玉芸術劇場)の一部のVTRを鑑賞しながら、理論の実践例をあげた。

近年の若松の作品では、テクノロジーの発展と普及により、コンピューターを駆使した作品創作がみられるが、『センサー』でも、コンピューターによる作曲や編曲、映像編集などを施し、マルチメディアへの挑戦が見られた。映像では、現在、世界を震撼させるテロ問題をモチーフとして用い、混沌とした現代の絶望や不安、その中で生きる人間のエネルギーと未来への憧憬が描かれていた。

ダイナミックなダンスシーンの直後、突然、演歌とともに、時代劇風の日本人男性が登場する点にイメージと手法の飛躍がみられた。

若松のソロでは、力の抜けた無の体現ともいえる身体表現が見られた。

## V. 結論

若松の舞踊理論は、舞踊総論から見ると、舞踊は循環性、呪術性を持ち、危機の緩和的情動反応と捉えられている。また、実践論では、内容と手法において現代性、多様性が追求され、作品創作は舞踊家の生きる時代の流動性と関係性の中での新たな挑戦であることが明らかになった。